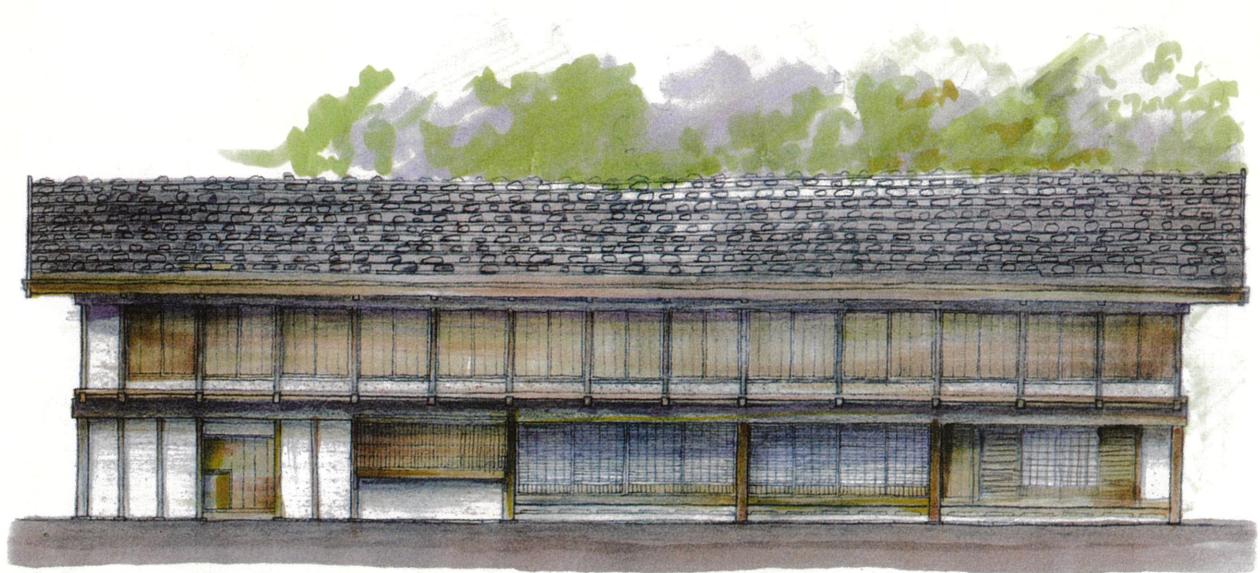


# 黒源

狩宿茶屋本陣 黒岩家

基礎調査概要報告



狩宿茶屋本陣（黒岩家）復元図

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

## ●調査に至る経緯

黒岩家は代々茶屋本陣の建物（吾妻郡長野原町大字応桑28-2）を受け継ぎ大切にしてきた。前々当主黒岩齊治氏は兄源一郎の長女の夫で甥にあたる水原徳言氏とともに本建物について調べ、その重要性を町誌編纂や記念碑設立などで示してきた。その息子である前当主黒岩源二郎氏もそれを踏襲してこれまで本建物を何とか維持してきた経緯がある。NPO法人北軽井沢コンソーシアム（後に北軽井沢じねんびと）によって北軽井沢を多角的に調査した結果、“はじまりは浅間牧場（吾妻牧場）の開設”との結論に至り、それに携わった本建物が現存していることを知った地元在住の福嶋誠、土屋博義、鎌原郷司、萩原要等は平成25年度数回にわたり視察を行っていた（後にこのグループは狩宿本陣研究会として発展する）。平成26年2月に前当主黒岩源二郎氏と後藤元一（後藤環境デザイン研究所）、小畠廣永（ヒロデザイン研究所）、伊郷吉信（協同組合伝統技法研究会）が福嶋誠を介し面談、視察を行い、歴史ある貴重な遺構であることを確認した。その後、残念なことに黒岩源二郎氏は同年5月に亡くなつた。同年6月に伊郷、大澤紀和により自主調査が行われ、その後、後藤、小畠により周辺の自主踏査が行われている。現当主をはじめその兄弟は「維持・管理」が困難なことから本建物の解体を検討しあじめたことから、同年8月に伊郷が簡易レポートを作成し、狩宿本陣検討会が開催された。これを受けた長野原町教育委員会は、建物の価値を判断する正式な調査を行うことになった。

## ●調査の概要

調査期間：平成26年11月19・20日（補足調査：同年12月10・11日）

調査体制：協同組合伝統技法研究会ほか

調査内容：1. 建物調査

- ①敷地と建物の配置図、各階平面図・立面図・断面図などの作成
  - ②上記建物の図面化
  - ③痕跡による建物の沿革の確認
  - ④現状建物の写真撮影
2. 環境調査
- ①周辺状況の調査、写真撮影
  - ②資料の収集
  - ③聞き取り調査



写真1 基礎調査風景

## ●調査の成果

### 1. 周辺環境

#### (江戸時代)

- ・信州街道と沓掛街道の交差点に位置する。
- ・信州街道には大戸・狩宿・大笛に関所が設置され、寛文4(1664)年～明治2(1869)年の間、江戸幕府の管轄下に置かれていた。
- ・本建物周辺は宿場を形成していた。関所設置に伴い、もともとの地主に加えて滝原や狩宿から出てきた人々によって新しくつくられた宿場と考えられる。“狩宿新田”と呼ばれていることからもそのことが窺われる。街道の中央南寄りに堰があったことや地割りの痕跡も残っていることが確認された。
- ・中山道の脇街道にあたり、表街道を“本陣・脇本陣”と呼称するのに対して、裏街道は“茶屋(本陣)”と一般的に呼ばれていた。但し、宿泊記録等の文献的な裏付けが必要であろう。

#### (明治以降)

- ・前時代からの旅籠を継承するが、時代の流れとともに交通手段が変化し、宿場機能を失って現在に至っている。後述するように黒岩家は代々、要職を歴任しており、前時代からの有力者であったことが窺われる。



写真2 明治末期の狩宿宿（矢印が茶屋本陣、大木は朝鮮五葉松）



図1 街道図（金井幸佐久1987『上州狩宿関所御用留日記』をトレース・一部改変）

## 2. 黒岩家系図とゆかりの人々

- ・図2は『黒源家記』(昭和51年、黒岩齊治)、『法要記念応桑富田屋について』(昭和46年、黒岩助太郎)、『中居屋のしおり』(昭和48年、黒岩敏而・黒岩幸一)をもとに作成したものである。
  - ・各家に伝わる移住説によれば、京都の吉田神道家の子孫である吉田一族が、浅間山麓の各地に移り住み黒岩姓を名乗ってきたという。
  - ・**黒岩長左衛門**（吾妻の分限者）、**中居重兵衛**（豪商・蘭学者）、**水原徳言**（写真7：みはらとくげん、ドイツ人建築家ブルーノ・タウトの弟子、工芸家）、**林の浦野家**（齊治妻志げ子（茂子）が浦野安の長女）などと親戚筋にあたることが分かる。
  - ・黒岩家は代々、要職を歴任している。郵便局長・戸長（源十郎）。小学校教員・応桑村与喜屋村連合戸長・吾妻牧場主事・町長〈13・14代〉（有哉）等々。
  - ・特に源十郎の弟有哉氏が、**北白川宮能久親王**（写真3・4：きたしらかわのみやよしひさしんのう）によって開設された吾妻牧場の主事に抜擢されたことは大きな出来事であった。北白川宮は計4回牧場を訪れているが、明治18・22・23年の3回は黒岩家に宿泊された。その際宮から指示があり、便所および湯殿、畳・障子など建具を新調したことが有哉の日記に記されている。この時新調したと思われる建具が現存している。また北白川宮第5王子**二荒芳之**（写真5：ふたらよしゆき）を密かに

預かり約3年間養育した。王子は明治27年4月に応桑尋常小学校（現在の応桑小学校）へ入学されたが、その後すぐに宮家へ復された。このような経緯もあり、明治31年に校舎を改築した際に北白川宮家より百円の御寄付をいただいたている。



写真3 北白川宮能久親王



写真4 北白川宮能久親王銅像  
(東京都千代田区北の丸公園内)

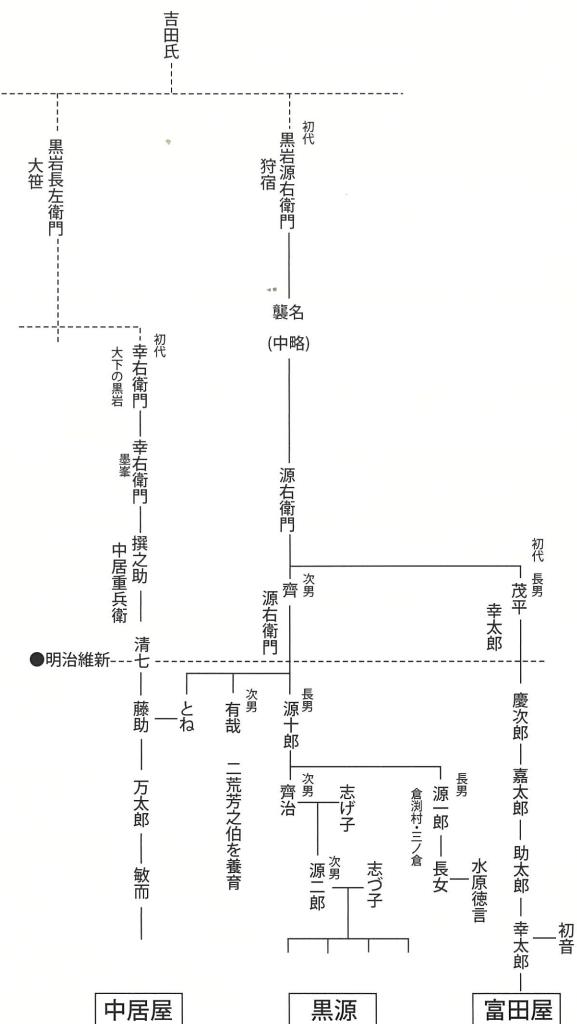


図2 黒岩家関連系図

※写真3・4はWikipediaから引用。  
写真7は白井晟一研究所Weblog(<http://shiraiseiichi.iugem.jp/>)より引用・抜粋。



写真5 黒巖有哉と二荒芳之



**写真6 黒岩源一郎と齊治**（手前が源一郎。昭和34年以前、朝鮮五葉松の前にて）



写真7 水原徳言

(復元)

- ・齊治方眼紙の図（図8）を参考に明治期の間取りを復元すると、間口15間、奥行き7.5間である。土間の東端に馬屋、茶の間は吹き抜け、殿居・上段の間・中の間の2階部分も部屋ではなく天井裏となっていた。2階は客室4部屋があり、土間の上は板間となっていたと考えられる。階段は2箇所あったと考えられるが、いずれも解体された部分であった。また点線で表現しているが1階北西隅の便所は後補である。
- ・建物周囲は建物の東側に通路を挟んで土蔵があった。街道側に東西2箇所に門扉が設置されていた。
- ・建物北西側の「狩宿本陣碑」付近に1丈5寸（直径3.1818m）の水車が2輪あったが伊勢湾台風（昭和34年）で朝鮮五葉松が倒れ、水車小屋を直撃した。

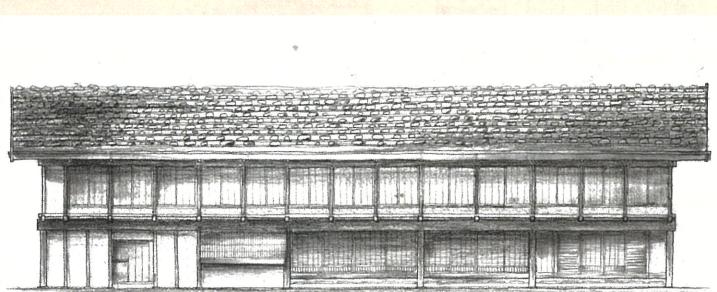


図5 復元北面立面図

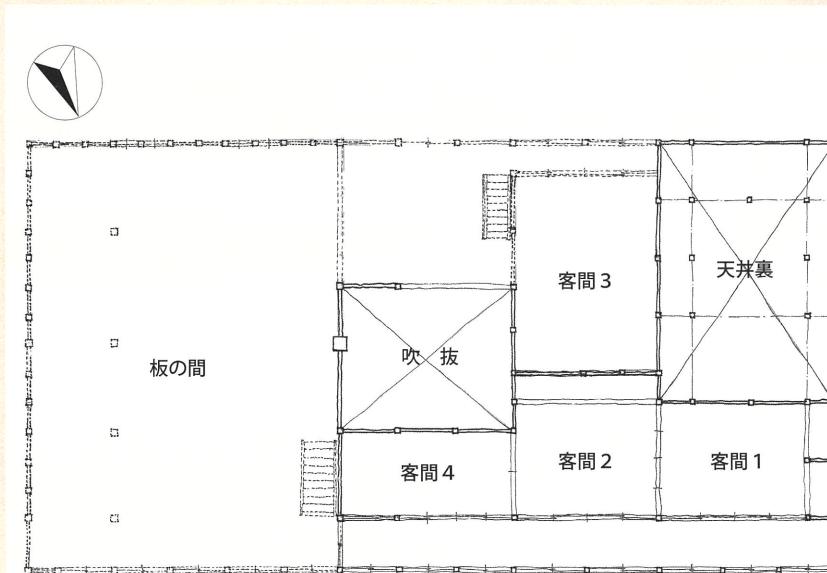


図6 復元1・2階平面図

2階



写真12 2階吹抜 柱切断跡

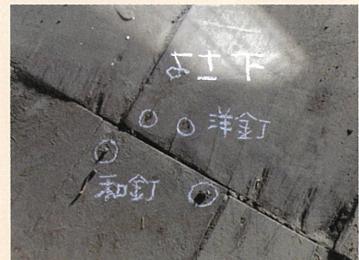


写真13 2階吹抜 和釘と洋釘

1階



写真14 上段・中の間境 後補鴨居



写真15 上段・中の間境 当初鴨居痕跡（床が12cm下げられている）

### 3. 建物の現況と復元

#### (現況)

- 創建年代は不明。出梁造り、石置き屋根（現況はトタン葺き）とこの地域の近世以来の建物に特徴的な建築様式を遺している。
- 規模は間口9.6間（17.42m）、奥行き7.4間（13.48m）、床面積は1階171.99m<sup>2</sup>（52.04坪）、2階134.97m<sup>2</sup>（40.83坪）、合計306.96m<sup>2</sup>（92.87坪）。
- 生活様式に対応して改築し、最低3回の大きな変遷が辿れる（図7）。建物東側の土間部分・南東側は解体されている。
- 改築部分の使用釘は洋釘（丸軸）、上段の間と中の間の天井には和釘（角軸）が使用されている。上段の間は床を12cm下げているが、それ以外は手を加えていない。
- 2階は当初から客間を備えていた造りで養蚕のために間仕切りが取り払われたと考えられる。

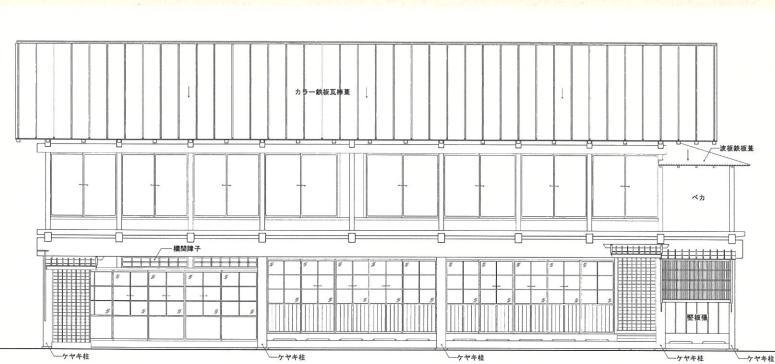


図3 現況建物北面立面図

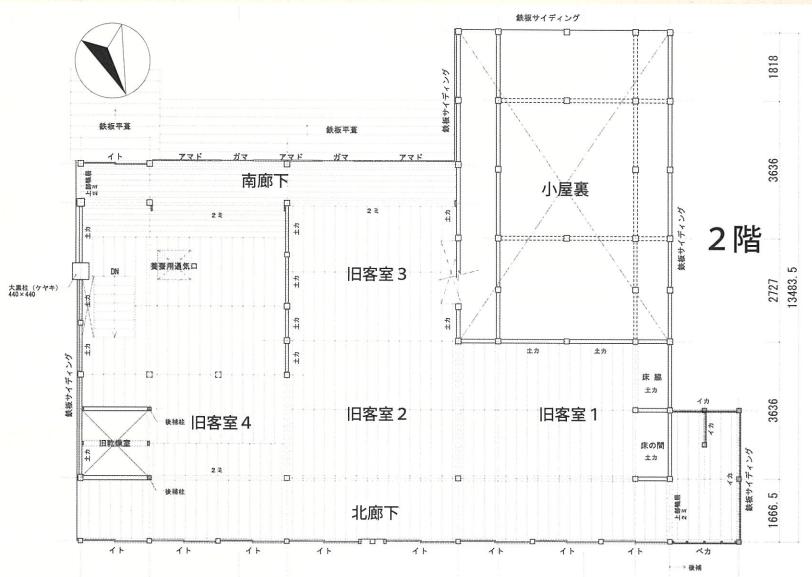


写真8 建物西南面



写真9 建物南東面



写真10 2階蚕室（旧客間4）



写真11 上段の間・中の間・表の間

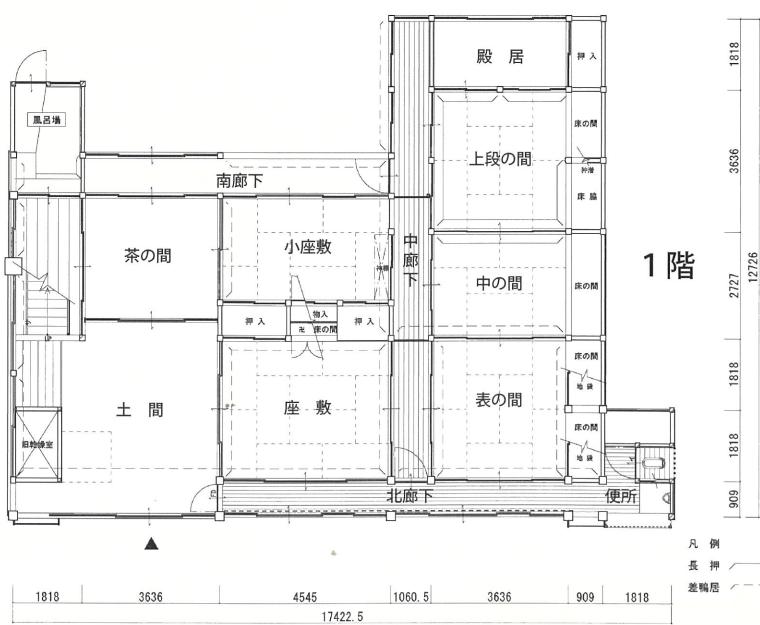


図4 現況建物1・2階平面図

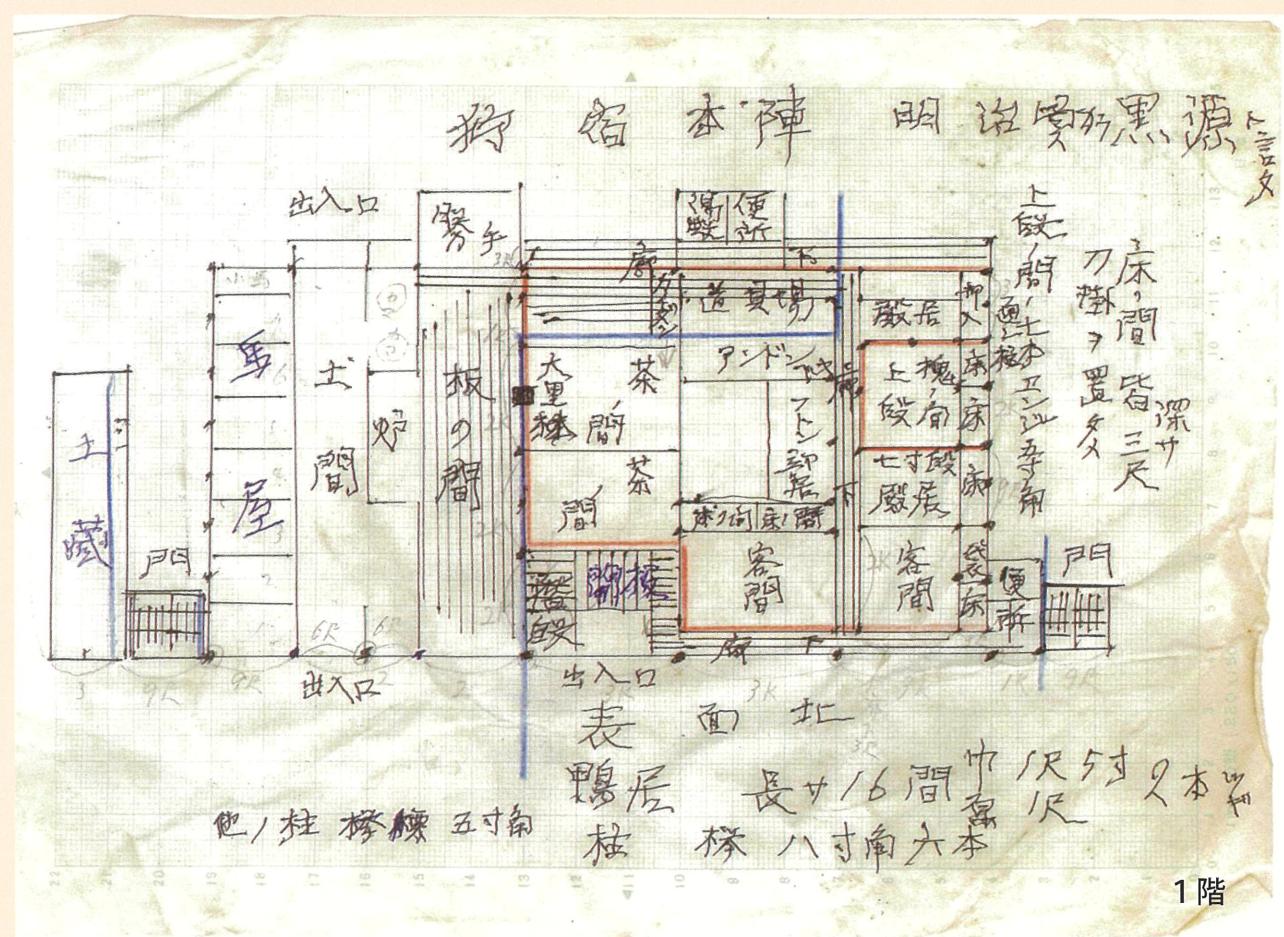
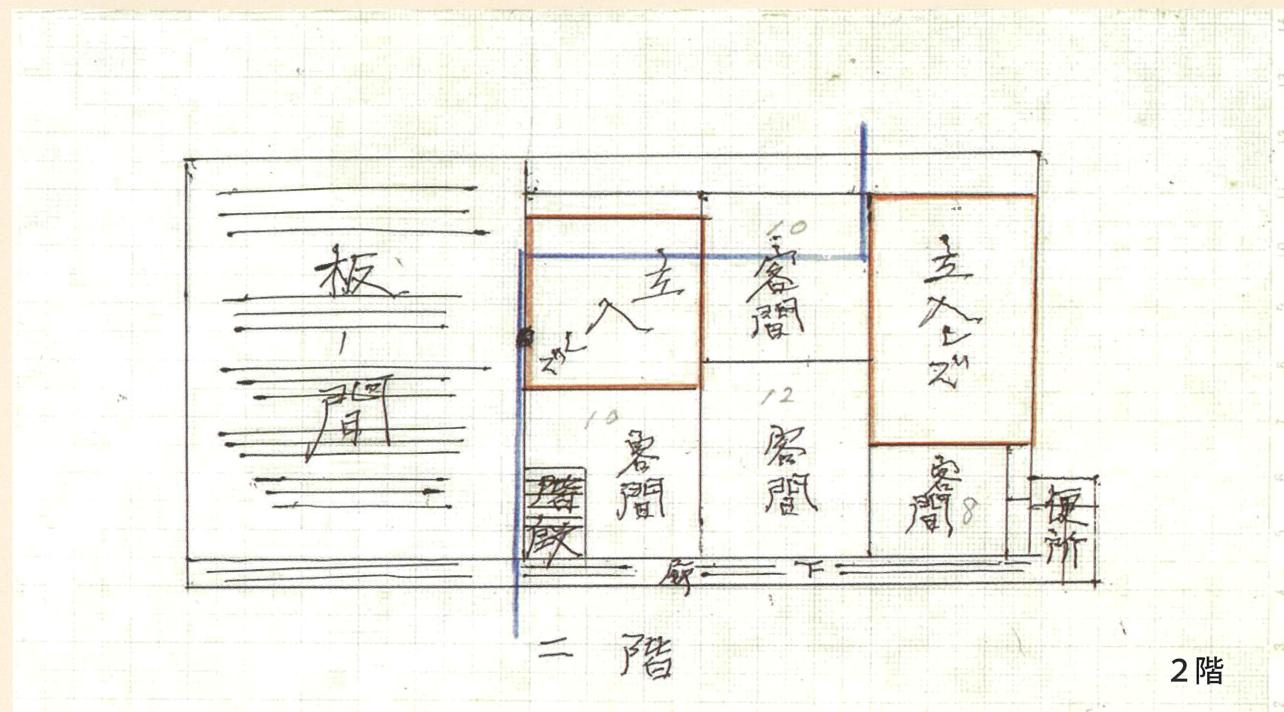


図8 齋治方眼紙の図（今回の調査で初めて発見された）

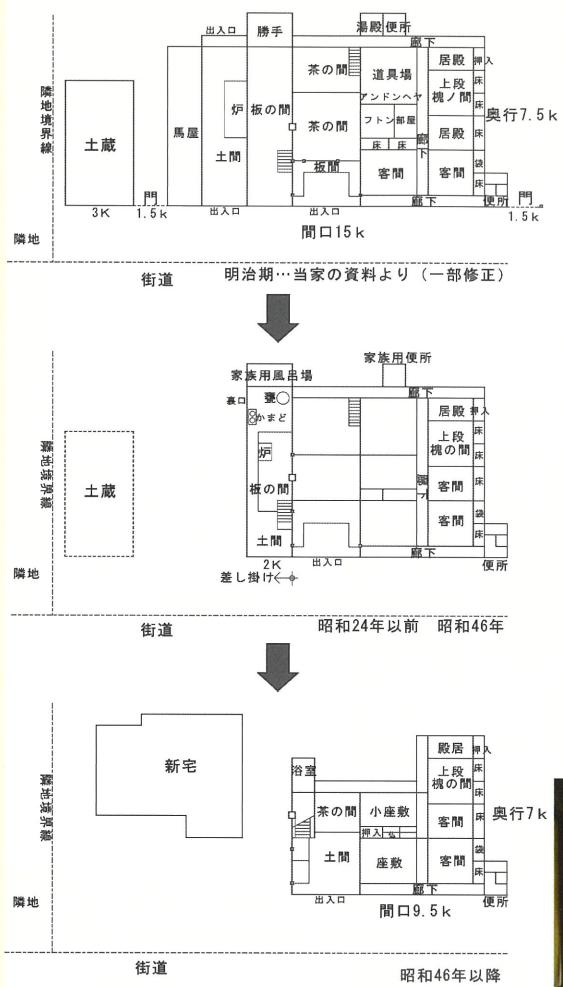


図7 建物変遷図

#### (建物の変遷)

明治18年

北白川宮親王宿泊のために南側廊下前に湯殿と便所を増築した。この時に建具なども新調した。

「今日も記念のために残してある」(その後の有哉の日記より)

#### 時期不明

養蚕のために2階を改造した。

この時は客間の鴨居はそのままであったが、後に上段の間を改造した時に転用した。

#### 昭和24年以前

大黒柱筋から東側を間口2間分残し、馬屋と土間、2階板の間を撤去し、屋根は差し掛けにした。

昭和24年志づ子さん嫁入りの時はこの状態であった。

#### 昭和30年代後半以降

南側の一部を解体撤去した。

#### 昭和46年

新宅建設のために、大黒柱筋から東側を撤去し現在の姿になる。土間にあった階段を現在の位置に移動した。南に風呂場新設する。上段の間の床を下げた。齊治氏が使いやすくしようと近所の人に頼んで工事した。



写真16 土間と座敷境の建具



写真17 表の間建具 (金革唐紙)

## 4. まとめ

- ・「出梁造り・石置き屋根」というこの地域の近世以来建物の特徴を遺している。
- ・本陣建築の特徴である「上段の間・中の間・表の間」が現存しており、ほとんど手が加えられていない。
- ・復元規模は間口15間・奥行7.5間で全国的にみても大規模な町屋である。
- ・黒岩家は当時の有力者・著名人と親戚筋にあり、現在の浅間山北麓高原地域の発展の端緒となった吾妻牧場を開設する際、北白川宮が宿泊された建物であることが再確認された。
- ・創建年代を示す文献は見られないが、天明3年の災害時に常林寺の和尚が当家へ法事で訪れていて難を逃れたとの云われがある。これが本建物であるとすれば天明以前の創建と言えるが、建築学的観点からその可能性は低い。別の機会に村田敬一氏（群馬県文化財保護審議委員）に視察指導をうけた際、「茶の間の吹き抜けや殿居・上段・中の間の上が屋根裏となっていることから間違えなく江戸時代の建物といってよいが、柱間の寸法から遡って文政・天保期（1820～1830年頃）ではないか」との見解をいただいている。
- ・長野原町の主要な長野原宿・羽根尾宿が泥流に埋没したことから、これら災害地域の復興に物資輸送・供給の観点からこの狩宿宿が果たした役割は大きいと考えられる。
- ・長野原町で関所・茶屋本陣・街道が揃って遺っている箇所は他にない。本建物は狩宿関所跡に付随するかたちで現存し、また街道筋も宿場の地割りが未だに残っていることから周辺環境とともに後世に残していく歴史的財産であると考えられる。

## ●今後の課題

- ・地元への周知と理解を得る地ならしが必要である。<町民の理解>
- ・「公有化」する。個人所有では補助金はないといつてよい。<地権者の理解>
- ・「国の登録文化財」を目指す。土間部分が欠如しているため、県指定は困難である。公有化して活用計画を策定すれば、耐震補強や便宜施設に補助金を充てることができる。<予算確保の問題>
- ・長期的な保存・活用計画を策定し、一過性のものにしない。<管理・運営>



■本冊子は、長野原町教育委員会が平成26年度に実施した「狩宿茶屋本陣基礎調査」の調査報告書のうち、調査の趣旨や内容、結果について概要版として紹介することを目的に刊行した。

■本冊子における成果は、協同組合伝統技法研究会に委託して実施した調査報告書に基づいて、事務局が編集したものである。

■故黒岩源二郎氏、黒岩家の皆様には調査に快諾いただき、多大なるご協力を賜った。記して感謝申し上げたい。

■本冊子を刊行するにあたり、以下の方々・団体から御指導・御協力を賜った（五十音順敬称略）。

浅井洋・伊郷吉信・小畠恂子・小畠廣永・神倉稔・鎌原郷司・後藤元一・齊藤英敏・土屋勇・土屋西造・土屋博義・萩原勝海・萩原要・萩原静江・福嶋明美・福嶋誠・藤野麻子・村田敬一・狩宿本陣研究会・協同組合伝統技法研究会・群馬県教育委員会

## 狩宿茶屋本陣（黒岩家）－基礎調査概要報告－

発行日：平成 27 年 11 月 30 日

発 行：群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒 377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋 174  
TEL 0279-82-4517 FAX 0279-82-4519

印 刷：朝日印刷工業株式会社